

明治の女性作家

文学場の再編と女性作家

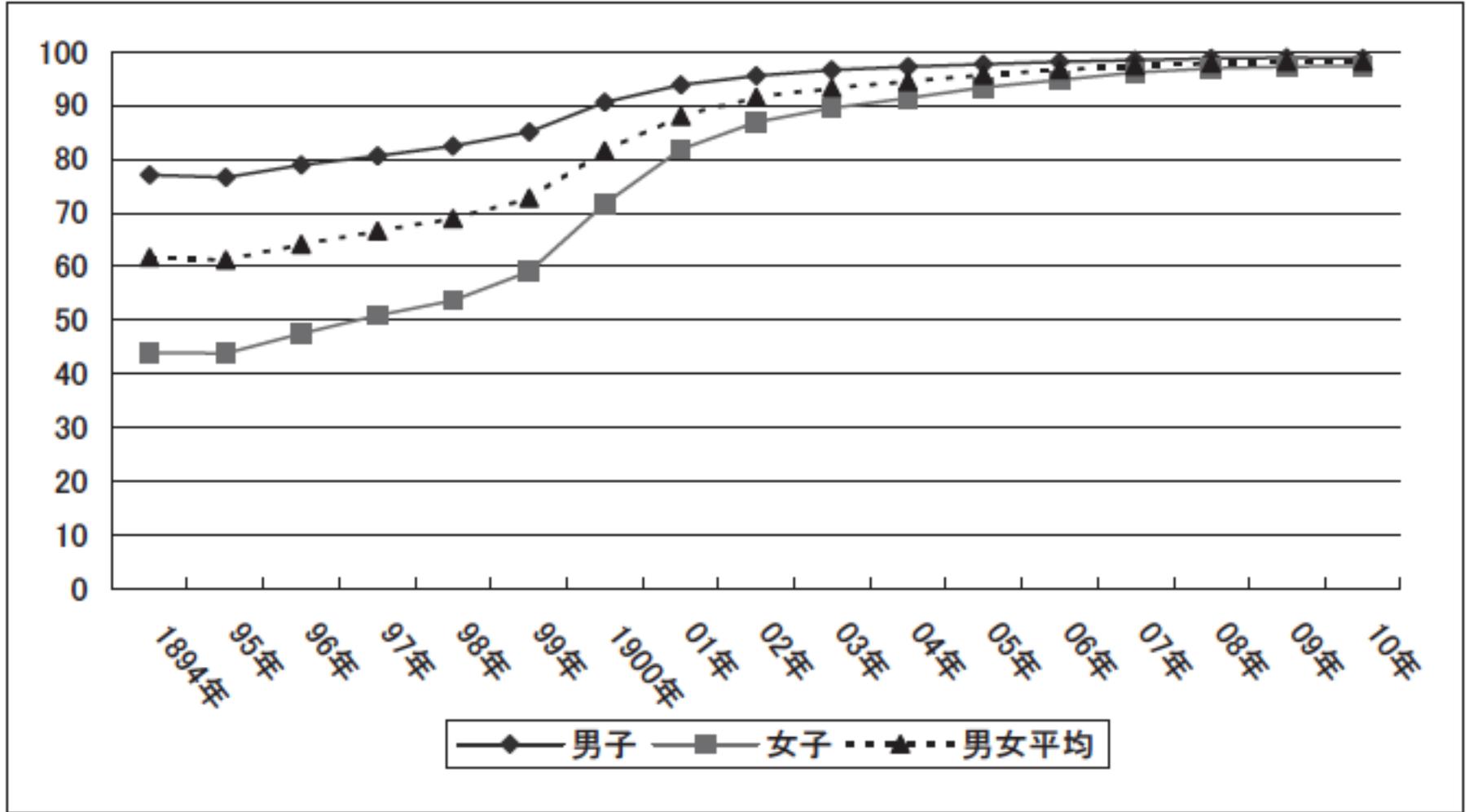
女性作家の四つのピーク

- ① 1896-1897 日清戦後
- ② 1906-1916 日露戦後
- ③ 1927-1929 関東大震災後
- ④ 1938-1939 日中戦争開戦後

女性と近代

- 女子教育
- 男女同権論

図3 明治後期における尋常小学校就学率の推移（1894～1910年）



<出典>文部省『日本の成長と教育』昭和37年 180頁 付表3 から作成

女学校

1873:合計38人:8-15歳

1875:14-17歳

ヘボン施療所キダ一塾(1870年)- フェリス女学院大学

官立東京女学校(1871年-1877年)

新英学級及女紅場(1872年)- 京都府立鴨沂高等学校(日本で最初の高等女学校とされている)

女子小学校(1874年)- 学校法人青山学院

東京女子師範学校(1874年)

跡見学校(1875年、跡見女学校) 学校法人跡見学園

エディ女学院(1875年) - 学校法人平安女学院明治館

駿台英和女学校(1875年)

女子寄宿学校「神戸ホーム」(1875年) - 神戸女学院大学

札幌農学校女学校(1876年-1877年)

同志社女子部/同志社女学校(1876年) - 同志社女子大学

桜井女学校(1876年)

立教女学校(立教女学院、1877年)- 学校法人立教女学院

梅花女学校(1878年) - 梅花学園
永生女学校(1879年) プール女学校(1890年) - プール学院
活水女学校(1879年) - 活水女子大学
神戸女子神学校(1880年) - 聖和大学
和洋裁縫伝習所(1881年) - 東京家政大学
東京女子師範学校附属高等女学校(1882年)
東洋英和女学校(1884年) - 東洋英和女学院大学
ウヰルミナ女学校(1884年) - 大阪女学院大学
順正女学校(1885年) - 岡山県立高梁高等学校家政科
明治女学校(1885年-1909年)
華族女学校(1885年) - 学習院/学習院女子中等科
宮城女学校(1886年) - 宮城学院女子大学
共立女子職業学校(1886年,共立学園) - 共立女子大学
広島女学院(1886年) - 広島女学院大学
捜真女学校(1886年) - 捜真女学校中等部・高等学部



1875 東京女子師範学校の図



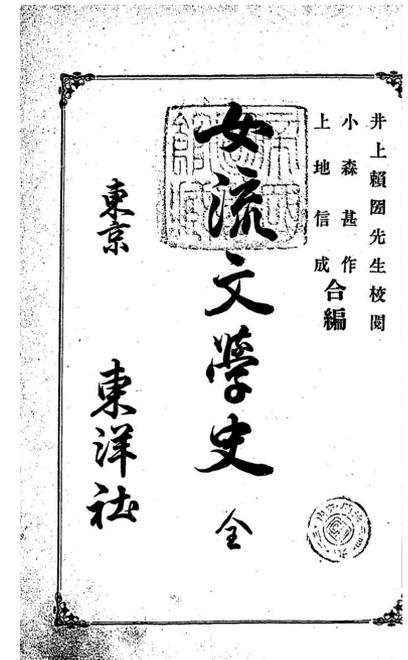
明治16(1883)年2月 女子師範学校小学師範科卒業生

「女流作家」というカテゴリー

1901 『女流文学史』小森甚作,上地信成編、東洋社
1901-1902 『女流文学叢書』第一編・第二編 広池千九郎等校訂標註 東洋社

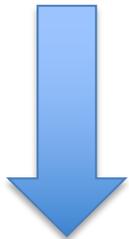
○上古から江戸まで 明治の作家は含まず。

○我国文学の中にも、取りわきて和歌和文こそ、女子には適すべきものなれ、女子はよろづ優美なるを尚びて、形相不可なるは好ましからず。……男子は日光の如く、強かるべく、女子は月光のごとく、やさしかるべし。……馬淵翁、曾て奈良朝を男子の国といひ、平安朝を女子の国といはれける。(『女流文学史』序)



○巖本善治「女子と小説」『女学雑誌』1887(明19).7.15

女子は小説の作者たるに適するや否や(略)吾人の私考には**女子の作者たるに適する**は勿論時としては男子にまさることあり。



湘烟「善悪の岐」・花圃「藪の鶯」・曙「婦女の鑑」・秋月「許嫁の縁」・竹柏園「胸の思」.....1987-89に発表の作品

○巖本善治「女流小説家の本色」『女学雑誌』1890(明23).3.16

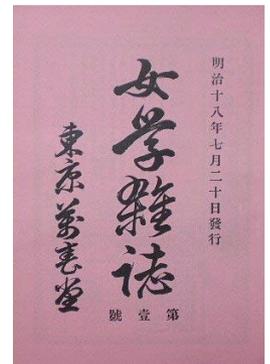
尤も需要あり尤も有益なる書籍の女流の手に成ること甚ダ少なくして、**流行又流行殆んど見るに厭ふ小説界中に反つて切りに女流の著作現はるゝを見る、故に吾人は或は之を惜しみ或は之を奇しまざるを得ず。**

○清水豊子「女文学者何ぞ出ることの遅きや」1890(明23).11.29

今代の紫女何処に潜める、明治の納言何処にある、妾は切に君を待つ、否妾よりも社会は猶且夙に、君を待ちつゝ居るならむ。

* 理念的には推奨されても、実作については否定的評価

『女学雑誌』1885.7-1904.2



中島湘煙(岸田俊子)

- 1863.12.5(旧暦)、現在の京都府に生まれる。
- 1877 京都府女子師範学校に入学、病で退学。
- 1879 宮中に文事御用掛として出仕、皇后に漢学を進講。
- 1881 秋に御用掛を辞め遊歴。自由党員の坂崎紫瀾・宮崎夢柳を知る。
- 1882 日本立憲政党的演説会で「婦女の道」の題で演説。
- 1883.10 滋賀県大津での演説後、拘引され入獄。
- 1884 星亨主宰『自由燈(じゆうのともしび)』に論説。
- 1886『女学雑誌』に湘煙の筆名で論説発表。自宅で塾。
- 1887 翻案『善悪の岐(ふたみち)』を粧園女史の筆名で。
新栄女学校の和漢学科主任になる。
- 1888 フェリス和英女学校名誉教授になる。
- 1889 小説『山間の名花』を『都の花』に発表する。
- 1892 イタリア公使になった信行とともにローマに出発。
- 1893 病気のため信行とともに帰国する。
- 1901年 5月25日午後1時15分に肺結核のため逝去。



藪の鶯



- M21. 6、金港堂
- 春の屋主人閑、福地桜痴序、中島歌子跋
- 田辺花圃

明治1年(1868)、本名は田邊龍子。旧幕臣で元老院議員の父・田邊太一、母・己巳子(きみこ)の長女として生まれる。麴町小学校(8)、跡見花蹊の跡見塾、中島歌子の萩の舎塾、桜井女学校(15)、明治女学校(19)、東京高等女学校(現・お茶の水女子大学)専修科に入学。明治21年『藪の鶯』を刊行。明治22年(1889年)卒業。明治25年三宅雪嶺と結婚。

三宅花圃『藪の鶯』

4773
No. 10150



花圃主人
三宅 著

東京
金港堂

藪の鶯
全



1888(M21).6
金港堂

藪の鶯の女学生

- 篠原浜子 兄・勤
- 山中 情婦お貞
- 松島秀子 弟・芦男
- 服部浪子
- 宮崎 兄・一郎
- 齋藤
- 相沢



於鹿鳴館貴婦人慈善會之圖、橋本周延、M20

- 斎「アアいやだワいやだワ。あたしはそんなことを聞くと。ほんとにいやになってしまアー。一生懸命で学問しても。奥様になりやア仕事をしたり。めんどくさくっていやだワ。わたしゃア独立して**美術家**になるわ。画かきになるワ。美術の内で。歌舞音曲その他一二を除いて。源は皆な画ですとサ。だから画は美術の King。オヤ。フェミニンの方かしらん。じゃア Queen だワ……。あたしはきつときつと画かきになるワ。
- 相「オヤ斎藤さんが画工になるって。こんなめんどくさがりのくせにネ。
- 服「斎藤さんだとて一心一到ですもの。画かきになれますワ。
- 相「オヤオヤ。じゃアあたしも一心一到だから。この間理科で高点をとったから。それを規模にして**理学者**になろうか。あなたハ。
- 宮「私しはこの学校を卒業すれば**奥様**になるワ。お浪さんあなたもそうでしょう。
- 服「ソウネー。私しは文学が好きですから。文学士か何かのところへ行って。**御夫婦ともかせぎ**にするワ。
- 斎「オヤお仲のよいこと。あたしは亭主なんぞは。ほんとにほんとにもちたくないワ。
- 宮「じゃアお浪さんは。うちの兄さんのところへお嫁にいらっしゃるといいこと。そうだと嬉うれしいけれど。

治安警察法

1890年(明治23年)集会及政社法

- 女性の政党結社への加入及び政治演説会への参加禁止

1900年(明治33年)治安警察法

第五条 左ニ掲クル者ハ政事上ノ結社ニ加入スルコトヲ得ス

- 一、現役及召集中ノ予備後備ノ陸海軍軍人
- 二、警察官
- 三、神官神職僧侶其ノ他諸宗教師
- 四、官立公立私立学校ノ教員学生生徒
- 五、女子
- 六、未成年者
- 七、公権剥奪及停止中ノ者
- 2. 女子及未成年者ハ公衆ヲ会同スル政談集会ニ会同シ若ハ其ノ発起人タルコトヲ得ス

1922一部改正

- 若松賤子 「小公子」『女学雑誌』M23-25
- セドリツクには、誰も云ふて聞かせる人が有ませんかつたから、何も知らないであつたのでした。／おとつさんは、イギリス人だつたと云ふこと丈は、おつかさんに聞いて、知つてゐましたが、おとつさんの没したのは、極く少さいうちでしたから、よく記憶して居ませんで、たゞ大きな人で、眼が浅黄色で、頬髯が長くつて、時々肩へ乗せて坐敷中を連れ廻られたことの面白かつたこと丈しか、ハツキリとは記憶してゐませんかつた。



樋口一葉 1872-1916

- 1872年 東京生まれ。
- 1877年 私立吉川学校に入学
- 1881年 上野元黒門町の私立青海学校に転校。
- 1883年 青梅学校高等科第四級を首席で卒業。
- 1886年 中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門。
- 1888年 相続戸主に 前年に長兄泉太郎死亡。
- 1889年 父死亡。渋谷三郎と婚約するも、先方から破談に。
- 1891年 半井桃水に師事。
- 1892年 「闇桜」「別れ霜」「たま櫛」「うもれ木」など
- 1893年 竜泉寺に転居。荒物屋。「朧月夜」「雪の日」「琴の音」
- 1894年 「花ごもり」「暗夜」「大つごもり」
- 1895年 「たけくらべ」「軒もる月」「ゆく雲」「経づくえ」「うつせみ」「そぞろごと」「にごりえ」「十三夜」。文名あがる。
- 1896年 「この子」「わかれ道」「たけくらべ」「裏紫」「われから」。11月、病没。



① 日清戦争後

文藝復興部 臨時増刊 第三 團圓小説

一沈一浮... 湖烟 女史 やれ鏡... 石搏 若子 うたかた... 穂積ふし子
心づくし... 小金井喜美子 心の鬼... 紫琴 女 さよ 嵐... 秋山 露子
深雪... 白魚 女史 子煩悩... 田中 夕風 かへ玉... ゆかり女
小公爵... 薄花 女中 白髪染... 薄氷 女史 志のび音... 大塚浦楠子
女波男波... 千鳥 女史 初戀... 蕙香 女史 蛇物語... 花圃 女史
附録... 羅レンス... 若松 殿子 寫真銅... 肖像... 長田蕙香君 繪畫... 野口
唯我獨尊... 稻舟 女史 版口繪... 肖像... 三浦千鳥君 繪畫... 野口
うつつせみ... 一葉 女史 蕙香君 繪畫... 大塚浦楠子君 繪畫... 野口
一月廿五日發行 發兌元 東京日本橋區 本町三丁目 博文館

全一冊洋裝
紙數二百九十餘頁
彩色木版寫眞畫人
正價十五錢
郵稅三錢

文藝復興部 臨時増刊

團圓小説

口給... 木原形彩色 (寄真) 肖像... 小金井喜美子君 若松殿子君 堀口一
花若子君等蹟... 三宅花圃君 跡見花塚君 野口小波君 大塚浦楠子君 藤島雪
色... 東海道與津の富士 奈良猿澤の池 同春口神社の鹿 甲州猿橋
はし... 中島 歌子 手箱の内... 藤島 雪子
萩桔梗... 花圃 女史 暮ゆく秋... 大塚浦楠子 女史
名譽夫人... 小金井喜美子 村時雨... 簪花 女史
忘れ片身... 若松 殿子 片しくれ... ゆかり女
十三夜... 一葉 女史 刷毛彩色... 石樽 わか子
黒眼... 薄氷 女子 やみ夜... あつ子
白ばら... 稻舟 女子 團圓小説の奥に... 西 升子
新詩... 夜風... 島田隆子 水車... 竹屋雛子 片戀... 花崎 秋海... 藤島 大磯の
時雨... 鳥了子 千鳥... 一川虎子 淺茅の露... 中村山鶴子 玉子うり... 紫水女 斷腸... 岡
秋好女... おはぐろ様... 酒井まが子 蕙香の美人... 鹿島さくら子 十五夜... 諏訪時子

十二月十五日發行
全一冊對版頗美本
紙數二百四十餘頁
木版寫眞畫十餘人
正價二錢五厘
郵稅二錢五厘

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

① 日清戦争後

文芸倶楽部 臨時増刊 第 一 号

一沈一浮……油煙 女史
心づくし……小金井喜美子
深雪……白魚 女史
小公爵……薄花 女史
女波男波……千鳥 女史

附録
唯我獨尊……稻舟 女史
うつつせみ……一葉 女史

一月廿五日發行

發兌元 東京日本橋區 博文館

文芸倶楽部 臨時増刊 第 一 号

萩桔梗……花圃 女史
名譽夫人……小金井喜美子
忘れ片身……若松 賤子
十三夜……一葉 女史
黒眼鏡……薄氷 女子
白ばら……稻舟 女子

新詩
夜風……島田藤子
西升子……西間の月
一川虎子……露芽の露
鳥了子……千鳥
酒井毛が子……露芽の美人

小説
手箱の……
村暮……
片刷毛……

世間では(略)、明治二十八年秋の文芸倶楽部の『閨秀小説号』なるものが出るまでは、余り多くは知らなかつたらうと思ふ。
(馬場孤蝶「明治時代の閨秀作家」『明治文壇の人々』1948)

十二月十五日發行
全一冊
紙數二百四十餘頁
正價二圓
郵費二圓五角

發兌元 東京日本橋區 博文館

大塚楠緒子 1875-1910



- M8 法曹の高官大塚正男・ノブの長女。東京生まれ。
- M22 共立女子職業学校から東京女子師範付属女学校に転校。
- M23 竹柏園佐々木弘綱のもとに入門。
- M24 美文「尋花」(『婦女雑誌』)
- M26 東京女子師範付属女学校を主席で卒業。
- M28 小屋保治を婿養子として迎える。
- M28 「くれゆく秋」(『文芸倶楽部』)
- M38 厭戦詩「お百度詣」(『太陽』)
- M39 単行本『晴小袖』
- M43 肋膜炎で没。漱石が追悼の句。

与謝野晶子 1878-1942

- 1878 堺に生まれる。
- 1900 与謝野鉄幹と出会う。「明星」に和歌を発表。
- 1901 与謝野鉄幹と結婚。歌集「みだれ髪」を発表。
- 1904 「君しにたまふことなかれ」
- 1912 鉄幹を追ってパリへ。
- 1921 鉄幹らと共に、文化学院設立。
- 1938 「新訳源氏物語」を発表。
- 1942 脳溢血で没。



『みだれ髪』(M34.8)

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよ
やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君
乳ぶさおさへ神秘のとばりそとけりぬこなる花の紅ぞ濃き
春みじかし何に不滅の命ぞとちからある乳を手にはさぐらせぬ
病みませるうなじに織きかいな捲きて熱にかはける御口を吸はむ



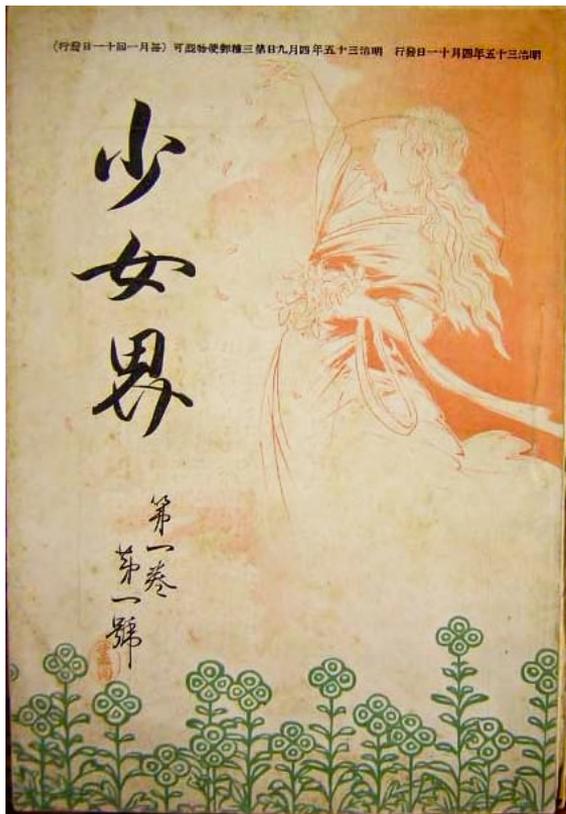
岡田八千代 1883-1962

- M16 広島陸軍衛戍病院長小山内健・鋤の三女。
広島生まれ。兄は小山内薫。
- M18 父没。東京麴町に転居。
- M35 成女学校特別選科に入学。
「めぐりあい」(『明星』)
- M36 劇評「真砂座の浮世清玄」(『歌舞伎』)
財政逼迫、縫い物仕事。
- M38 戯曲「蓬生」(『明星』)、短編集『門の草』
東京美術学校教授岡田三郎助と結婚
- M44 『青鞥』賛助員。
終巻まで十数作を寄稿。
- M45 編著『閨秀小説十篇』
短編集『絵の具箱』
- T6 短編集『八千代集』
- T12 長谷川時雨とともに『女人芸術』創刊
- S1 三郎助と別居



高等女学校

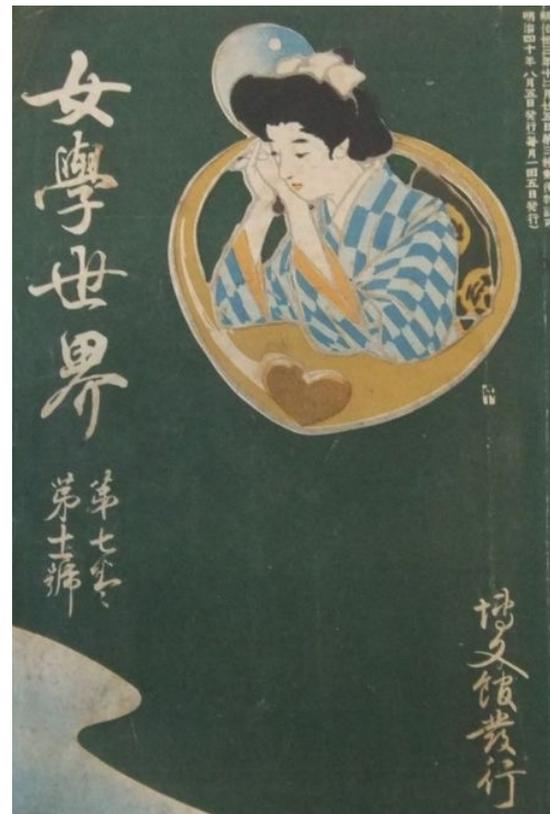
- 1893:M26 尋常中学校高等女学校技芸学校
設置ノ為メ町村学校組合ヲ設クルノ件
- 1894:M27 13校 2026人
- 1895:M28 高等女学校規定
- 1896:M29年 19校 4152人
- 1897:M30年 26校 6799人
- 1898:M32年 高等女学校令



1902-1912、金港堂



1906-1931、博文館



1901-1925、博文館

②日露戦争後

●女流作家

恋愛！ 神聖たワ、夫力
悲哀に終るダンテの神曲、
ハイネの詩、まあ何でも可いワ。
家庭的で、人の肺腑を抉る
やうな、写実的のものを起草して、
二十世紀の読書界をアツと
いわしてみたいワね。

『風俗画報』338、1906.4.10

* 家庭小説から自然主義小説へ



②日露戦争後

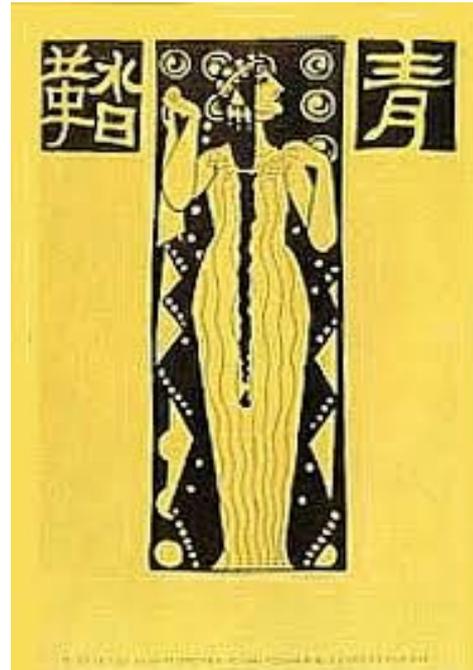
- 野上弥生子
- 田村俊子
- 水野仙子
- 尾島菊子
- 生田花世
- 素木しづ

* 新しい女

『新潮』特集「新しい女」1912.9

『太陽』特集「近時之婦人問題」1913.6

* 『女子文壇』・自然主義・『青鞥』



野上弥生子 1885-1985



M18 醸造業古手川角三郎・マサの長女。

大分生まれ。

M33 明治女学校に入学。

M35 家庭教師に野上豊一郎。

M39 卒業。豊一郎と結婚。

M40 「縁」(『ホトトギス』)

T11 「海神丸」(『中央公論』)

S6 『真智子』

S39 『秀吉と利休』 第三回女流文学賞。

S60 『森』日本文学大賞。



森しげ 1880-1936

- M13 元大審院判事荒木博臣の長女。東京生まれ。
- M30 渡邊勝三郎と結婚。
新婚生活二十日あまりで離婚。
- M35 森鷗外と再婚。
- M36 茉莉誕生。
- M42 鷗外の勧めで『スバル』に小説を発表。
- M43 単行本『あだ花』
- M44 『青鞥』の賛助会員に。
- M45 「りう子様に」(『青鞥』)以後文壇から遠ざかる。

田村俊子 1884-1945



- M17 米穀商佐藤了賢・きぬの長女。東京生まれ。
- M33 府立第一高等女学校卒業。
日本女子大学校に入学。
- M35 幸田露伴に師事。
- M36 「露分衣」(『文芸倶楽部』)
- M39 露伴から離れ、毎日文士劇に参加、女優に。
- M42 田村松魚と結婚。
- M44 「あきらめ」『大阪朝日新聞』懸賞小説一等当選。
- T7 鈴木悦のいるカナダへ移住。
- T11 帰国。
- T13 「山道」(『中央公論』)、中国へ。
- S17-20 上海にて雑誌『女声』刊行。

尾島菊子 1879-1956



- M12 売薬業尾島英慶・ヒロの次女。
- M15 父逮捕。
- M33 従姉ふさを頼って上京。
事務員・代用教員・女性記者・タイピストなど。
- M36 秋香女史の名で「破家の露」(『新著文芸』)
- M39 『女子文壇』の投稿家として頭角をあらわす。
- M42 『少女小説 御殿桜』
- M44 「父の罪」『大阪朝日』懸賞小説次席。
『青鞥』創刊準備の会合に出席。以後四篇寄稿。
- T3 小寺健吉と結婚。
- T4 『百日紅の蔭』

水野仙子 1888-1919



- M21 商家服部直太郎・セイの三女。
福島生まれ。
- M36 尋常高等学校卒、裁縫専修学校入学。
『少女界』に投稿。
- M37 裁縫女塾。
- M38 『女子文壇』などに投稿。
- M40 「お寺の子」『文章世界』の懸賞小説入選。
川浪道三と文通。
- M42 上京。花袋に師事。
年末より乳児を抱えた岡田美知代と同居。
- M43 「お波」(『中央公論』)山田邦子と同居。
- M44 川浪道三と結婚。
『青鞥』社員。以後六篇寄稿。
- M5 結核発病。

岡田美知代 1885-1968

- M18 銀行家岡田胖十郎・ミナの長女。
広島生まれ。
- M31 神戸女学院入学
- M35 『中学世界』に投稿。
- M37 上京。田山花袋に師事。
- M38 『女子文壇』にも投稿。
- M39 『文章世界』『新声』『文庫』『新潮』
『実業之横浜』『文章倶楽部』な
ど。
- M40 花袋「蒲団」を発表。
横山よし子の名で「『蒲団』につい
て」(『新潮』)



素木しづ 1895-1918



- M28 教育者素木岫雲・由幾の三女。北海道生まれ。
- M40 北海道庁立札幌高等女学校入学。
- M45 上京。結核性関節炎で右足切断。
- T2 森田草平に師事。「松葉杖をつく女」(『新小説』)
- T3 『三十三の死』 岡田耕三を追って大島へ。
- T4 上野山清貢とともに帰京。結婚。
- T5 『悲しみの日より』
- T7 『青白き夢』
- T8 『美しき牢獄』

『女子文壇』M38発刊

- 文なきの国は到底真武ある能ざるの至理を視るべきなり。顧ふに文武を分つときは、文事は女子の専技にして、武事は男子の特長たり。(発刊の辞)
- 諸嬢と記者、諸嬢の交際、交換
- 誌友倶楽部
- 四巻:スターの誕生 岡田美知代・服部貞子・山田邦子
- 五巻:覚めたる女の雑誌.....美文・散文欄

まとめ

- 女性作家と文学史
- 女性のリテラシー
- 書く女性たちの存在
- 雑誌文化の重要性
- 読者共同体の形成
- 「文学」の意味